

槐

かい

岡井省二創刊

平成24年10月号

平成二十四年十月一日発行 第二十二巻第十号 通巻第二百五六号 毎月一回一日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



順風満帆

高橋将夫

汗引いて熱き血潮の残りたる
命綱つけずに渡る虹の橋
戻れなくなつてをりけり虹の上
炎天をまた影持たぬ人が行く

背後から蛇が来さうや蛇の衣
日焼けの子裏も表もなく焼けて
雲割つて夏の日矢さす鳳凰堂
勝ち負けは遠の昔よ金魚玉
思ふよりよく見えてゐる簾ごし
心にも自然治癒力夏の潮
順風満帆ときどき青嵐

槐安集

水野恒彦

密教や空蟬の背のがらんどろ
どくだみの殖えて日暮のやうな家
夕焼空に一頭の蝶が消えた
蓮の花歳月かたる光あり
蚊喰鳥かすかに前の世さきの匂ひ

延広禎一

祝ょうかんば旬会十周年展
鮎化して虚空に跳ねる万華鏡
木簡に兵と租の文字田水沸く
メドウサの髪逆立てる極暑かな
漆黒を破る螢の愛と憎
車田に代搔いてをる神の御子



加藤みき

初蟬の二日違はずあらはるる
梅雨晴間夜の青空目に染みて
片かげり家の中から子らのこゑ
森かげの光る泡を螢とす
一匹は反対へ行け舟虫よ

石脇みはる

二人の夜琥珀色なる梅酒かな
松原を抜けて水着の親子かな
油揚げと茄子の煮物や多佳子の忌
森を来て落差大きな滝に出づ
滝壺の青渦巻の大きいなる

中島陽華

臍長けし碁打ちの手あり百日紅
雨安居や背_すに書く字は○なりき
ざくざくの胡瓜出されし淺草よ
鶴翼の扇たたみて白根山
皐月闇山の布袋はにんまりす

栗栖恵通子

熊楠の下駄のちびりや夏旺ん
鬱になるほどの暇なし蟻地獄
眼中に青き芒を飼ふてをる
瀧音に天地ありけり月輪寺
金魚玉淫らな母をやりすごす

竹内悦子

露涼し魁夷の青き世界かな
栗の花女はいつも化粧_{けはひ}して
螢袋右の窓よりよく見ゆる
連なつて六人がゆく鱧祭
行列の続きで氷小豆かな

大島翠木

恋螢闇を轆して飛び交へる
きぬぎぬの雨に濡れたる梅の花
亡き妻としばらく染まる梅雨夕焼
小田かはず青き地球にテロ続く
不借身命泣くにも泣けぬ羽抜鳥

雨村敏子

雲海や玉を抱ける五智如来
心太掬へば心揺れてをる
飛んだり潜つたり七月の鯨
母がゐてそのまた母や星祭る
螢火のひとつは上_ミに流れけり

本多俊子

青葉潮綿_{わたつみの}津見_{のみこと}命さながらに
てのひらに曼陀羅となる螢の火
この生を深く愛しむ夏の薔薇
川風や在りし日のまま江戸風鈴
青柿や母を越えしは齡のみ

近藤喜子

遠泳子いつしか水になつてをり
炎天や両の眼のずり落つる
空蟬にありし命の刻印
籐寝椅子この世だんだん遠くなる
猛々しき香を真夜中の百合の花

谷村幸子

葉がくれの大き西瓜をのぞきこむ
桑の実の熟れて神苑誰もゐず
花槐ひろがる下に憩ひをり
大寺の和尚なつかし仏桑華
閻王の前でさとさる子供かな

瀬川公馨

紺青と金色まとふ夏の明
冥界を追はれてゐたりねぶの花
虞美人草のあまたの種子を失敬す
梅雨茸の飛んで行きやる百道ももち浜
うきくさや空巢老人の臍

空巢老人 独居老人

久保東海司

田水張り忽ち村に水匂ふ
心ひとつに出目金を掬ひをる
金魚田に集ふ金魚の水は朱に
夜の秋煮炊きの他は音持たず
洪滞の起こることなき蟻の道

西村純太

蓮ひらき生しよあるものの浄土かな
のどぼとけ収めし壺と萬緑へ
空蟬の列なしてゆく昼の闇
隠沼の深々として蛇泳ぐ
国原の虹立つ果に吾が影

中野京子

万緑と息をしてをる大地なり
日を食うて太りしトマト食うてをる
水に降る光に開く蓮の花
日々は浄土の途上風薫る
黒蝶の湧くがごとくに紫蘇の風

柳川 晋

我を呼ぶ祭囃子と思ひ込む
甦るための笑顔と麦湯かな
香水に自惚れを足し媚薬とす
朝顔は業に巻きつき咲かむとす
空蝉の見届けてゐる宇宙かな

岩下 芳子

注連替へて真つ新の滝しぶきかな
海からの風と茅の輪をくぐりけり
ラムネ抜く手応へのあるガラス玉
華やぎのがらりと変る昼の床
人込みをすり抜けてゆくアロハシャツ



槐市集

時 澤 藍

鶏冠にも髭にも化けて立葵
みごしらへ完全武装草を引く
樟脳は昭和のほひ土用干し
虎の尾の癖をこなして活けにけり
木偶の手も借りて三人池浚へ

中 貞 子

夏雲は龍のひつぱりやつて来る
萱草や狐の嫁入り見てをりぬ
歌姫の昭和は古りし大夕焼
鬼灯や道の半ばにさしかかる
夕涼みさよならホームランに湧く

中 島 昌 子

願ひごとひとつに決めて星祭る
つやつやと願ひの糸の五色かな
風鈴を鳴らしてゐたり千の風
登り来て息をととのふ青葉の香
耳奥に祇園囃子のいまもなほ

中 田 禎 子

白バイに追ひ付かれたる兜虫
素ぴんの役者なりけり胡蝶蘭
夕焼や黄ばんでゐたる割烹着
銭亀やくらはんか舟往き来せし
恋多きギリシャの神や真夏の夜



槐集

高橋将夫選

七夕を流し鴨川細りゆく 京都 竹中 一花

祇園会の囃子届かぬ祇園町

にこにこ編む夏帽子いびつなり

花さびた草鞋地蔵の足濡るる

茂る樹の奥にありけり血天井

文鎮に押へられたる青葉風 枚方 熊川 暁子

着地まで輪廻の舞ひの竹落葉

仏法僧ならはぬ経を唱へをり

水孕ませてとんぼうの尾の撓ひ

杜鵑トウコウキヨヒと宣へり

朝焼けの東方浄土薬師仏 摂津 中田 禎子

かはほりを黄泉の使ひと思ひけり

古きものたんと落して木槿かな

遺伝子の糸脈々と墓

ブロンズの青鷺息をしてゐたり

法界へ届けとばかり椽の花 寝屋川 前田美恵子

城攻めの秘策を練るや青芒

老鶯や媚薬の効き目ありにける

野に入れば野に従へり桜桃忌

泡盛を一気に干すや海紅豆

十薬やイエスは清き血を流す 岡崎 岩月優美子

夏山に白き岩肌聖母とも

涼風やクピド現はれさうな森

青葡萄シチリアの海遠かりし

風死すや少年のこゑ二三人

お帰りと帰つて来る子梅雨晴間 枚方 近藤 紀子

青柿一つ落ちる音あり真昼なり

紅蜀葵邪気払ふ色に咲きにけり

太刀魚の銀色静か横たはる

死んだふりに飽きて飛びたつてんと虫

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

茂る樹の奥にありけり血天井 竹中 一花
武将が切腹した床を足で踏むような無礼がないようにと、床板を天井板にした寺がある。血天井と言って京都にも数箇所あるという。生い茂る樹木の旺盛な生命力が、はかない人の命を懐深く包み込んでいる。

〈祇園会の離子届かぬ祇園町〉の句は、熱狂の坩堝の中にも、それと無縁の静かな世界があることを示唆しているようで、心を打たれた。

〈七夕を流し鴨川細りゆく〉の句は、夏を迎えて次第に水量が減っていく鴨川的情景を上手に捉えている。

〈にこにここと編む夏帽子いびつなり〉の句はまことにおおらかな一句だと思ふ。

文鎮に押さへられたる青葉風 熊川 暁子
文鎮で押さえたのが青葉風であるところが眼目。元氣あふれる青葉風も文鎮で押さえられたら降参するしかない。風に飛び散ろうとする紙を押さえようとおろする作者の姿が目には浮かんでくる。

〈水孕ませてとんぼうの尾の撓ひ〉、蜻蛉が交尾のときのように水に尾をチョンチョンとつけている姿はよく見かける。それを、「水孕ませて」とは恐れ入るばかりである。

〈杜鵑トウコウキヨヒと宣へり〉の句は、「登校拒否と鳴く」

がいかに今風で愉快。〈仏法僧ならばぬ経を唱へをり〉は門前の小僧のパロディーがなんともユーモラス。

ブロンスズの青鷺息をしてゐたり 中田 禎子
鷺が身じろぎもしないで長時間立ちつくしている姿はよく見かけるし、よく詠まれているが、それをブロンスズ像と詠んだ句は初めて見た。そのブロンスズ像、よく見たら息をしているではないか。

〈古きものたんと落して木樫かな〉の句の「古きものを落す」の着眼は鋭い。本質を捉えている。本質はあたりまえの中にあるのだ。

〈朝焼の東方浄土薬師仏〉、朝焼だから東の空。そこに東方浄土があるという。浄土と言えば西方だとはかり思っていたが、東方にもあるらしい。〈かはほりを黄泉の使ひと思ひけり〉の句、確かに蝙蝠は黄泉の使いに見える。

城攻めの秘策を練るや青芒 前田美恵子
城跡の間際まで芒が青々と茂り、迫っているのであろう。それが城を攻める軍勢のようにみえて痛快である。

夏山に白き岩肌聖母とも 岩月優美子
夏山に見る白い岩肌は確かに聖母の肌を感じさせるものがある。〈涼風やクビド現れさうな森〉のクビドはキューピッド。作者らしい感性の一句。

お帰りと帰つて来る子梅雨晴間 近藤 紀子
「ただいま」と言うべきところを、「お帰り」言つて帰っているところが子供らしくてなんともかわいい。梅雨晴間の季節もすがすがし。(以下略)